

### 老化の意味論

—宿命であることを意識し、後生にバトンを渡す—

笠間市立病院 石塚恒夫

平均寿命の短かった昔にも長生きする人はいて、120歳とされる人間の限界寿命は変わっていません。しかし衛生環境の改善や医療の進歩で早死にすることは少なくなり、日本人の平均寿命は延びました。昔は老化による臓器不全が起ることはまれでしたが、超高齢社会を迎えた現代ではありふれた現象です。酷使したり炎症が起きていたりした臓器はもちろん、加齢でさまざまな臓器に機能不全が生じます。命に係わる臓器に障害が進めば、個体の死を招きます。

個体の老化は、臓器の老化・さらに細胞の老化に起因します。細胞の老化とは、細胞増殖の停滞による細胞数の減少です（通常、臓器萎縮を伴う）。細胞は生きていくうちに遺伝子の傷が蓄積するため、これ以上蓄積すると癌化すると判断すると増殖をやめるのです。つまり癌化を防ぐために、個体のことを慮って老化するのです。

紫外線や放射線のようなものを浴びなくても、細胞の酸素呼吸で発生する活性酸素でも遺伝子は傷つきます。酸素呼吸で

複雑な活動ができるようになった代償に、多細胞生物は老化するのです。遺伝子の乗る染色体の端には、分裂のたびに短縮するテロメアという構造があります。人間のテロメアは約50回の分裂で擦り切れるので、老化は宿命とも考えられます。それゆえに精子や卵子をつくる際に行われる減数分裂は重要であり、受精することで細胞は再生し増殖を再開できるようになるのです。

英国の生物学者ドーキンスはその著書「利己的な遺伝子」の中で、個体は遺伝子の乗り物と極論しています。それではなぜ、人間は生殖年齢を過ぎても生き続けるのでしょうか。祖父母が長生きして孫の面倒をみることでできた家系が淘汰されずに生き残ったとするのが、「おばあちゃん仮説」です。そうであるならば、たとえ子孫に恵まれなくても長生きして、後生のためにより暮らしやすくなるよう努力する地域・国・世界は、淘汰されずに生き残れるのではないかと考えるのです。

### 笠間の歴史探訪 11

#### 笠間の時鐘

笠間日動美術館の脇の登り坂は、四月の桜の時期には、美しい桜樹の花のトンネルとなり、この道を登り、鍵の手に曲がると山麓公園の入り口です。

寛永二十年（一六四三）笠間藩主浅野長直は、ここに下屋敷を建設しました。道をはさんで東側に「藩庁」「藩主御殿」西側に「御蔵」「御金蔵」「鐘楼」などがありました。

時鐘のはじまりは、寛文二十年（一七六二）当時の笠間藩主井上氏の家臣中島清右衛門尉友重が、新町の商人滝野伊兵衛一永に時鐘を設けるように提案して、佐白山正福寺の梵鐘を借り受け、大町にあった極楽寺に鐘つき堂（鐘楼）を建て、鐘をついて城下の人々に時を知らせたのが始まりといわれています。

のちに、茶釜の生産で知られている佐野天明（栃木県佐野市）で新しい鐘を鑄造し、宝永年間（一七〇四〜一七一〇）には、六十代の四人が鐘つきの仕事にあたったといわれています。（町方軒別書上）

三代目となる今の時鐘は、明治二十二年一時中断していましたが、明治二十二年から再開し、その後十四年間は、荒木尚弼が撞き手を務め、二代目は磯常吉が五年間、三代目は川上鶴吉が十四年間、そして大正十年（一九一）から四代目三村豊美が、昭和三十九年七月まで、実に四十三年に亘り、朝五時から夜七時まで、町の人々に時を告げていたのです。また、この鐘楼からは笠間の街がよく見渡せたので、火災の発見も早く、戦時中

には警報発令にも、鐘を打ちならしました。

笠間の詩人、田崎秀は、昭和三十三年「やわらかく時鐘のひびき溶けてゆく、盆地の空気吾も吸うひとり」と詠んでいます。

また、この年に、テレビ児童劇映画として、文化映画研究所が「鐘つき仙人と猪狩り」を笠間町の協賛を得て作り出した。三村氏の一身一体の働きと、公園内で飼育されていた小猪にまつわる小学生の動物愛をテーマにしたもので、「シナリオ」は手元に残されていますが、映画はどこにあるのか、知りたいものです。三村氏は、昭和三十九年、八二歳で没しました。その後、昭和四十五年、富士山中腹の佐白観音境内に移り、朝の鐘と除夜の鐘として、住職天津忠興氏と家族によって撞かれました。

昭和四十八年に笠間市は、時鐘を市指定文化財に指定し、住職がなくなったのちの平成十三年に、「時鐘楼」を建て、保存しています。

この「時鐘楼」は、自動で撞くことができる装置が施されているとのことなので（商工観光課所管）「時の記念日」などに、市民に広報した後、なつかしいこの鐘の音色を聞かせてほしいものです。

（市史研究員 能島 清光）



山麓公園 鐘楼